

愛国心の跋扈は許さじ

神と国家の間⑧

人・脈・記

ニッポン
jinmyaku@asahi.com



⑤クリスティーヌ・レイグさん 幸徳秋水

2008年パリで日本の本2冊の仏訳が出版された。幸徳秋水の『廿世紀之怪物』と『帝國主義と中江兆民』の二冊。帝國主義論問答である。訳者は、日本研究者クリスティーヌ・レイグ(56)。東京・恵比寿の日仏会館に彼女を訪ねた。

秋水の『帝國主義』の巻紙、中国の虎の絵めいた皮で装束ですね。「そうねえ、でも私、不満に思っていない。ほら、毛沢東が『帝國主義は張子の虎』と云ったじゃないですか」

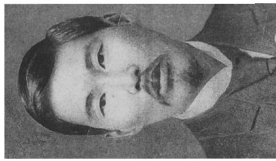
クリスティーヌは1981年、日本に留学、戦後の労働運動を研究した。「戦前にさかのぼったら、秋水や増村彦の『平民新聞』、速く自由民権の中江兆民を発見したの」。『諸藩大漢和辞典をひきつ、明治の日本語を訳したのだった。』

1901(明治34)年の『桜花爛漫の候』に秋水の『帝國主義』は出版されたから、レーニンの有名な『帝國主義論』よりも18年も前である。

「外国がぶれではない思想ですよ。レーニンに比べて経済分析がないといわれたけれど、私感動したの、彼の愛国心の批判に。それは一番重要な点」

秋水は説く。自分を愛して他人を憎む、同郷人を愛して他郷人を憎む。それが本当の愛か。自国のために他国を侵すのが「愛国心」ならば、それは「野獸的天性、迷信、狂熱、虚誇、好戦の心」である。秋水は嘆息する。「国民の膏血を絞って軍備を拡張、国家のためなりど。愛国心発揚は頼もしいかな」

クリスティーヌは秋水の言葉を感じた。この18年後、欧州の労働者の「インターナシヨナ



ルは「愛国心」をおおられ分断され、第1次大戦で互いに殺しあうことになったから。

なぜクリスティーヌが「愛国心」を問題とするか、彼女の家族史を聞いてわかった。

「フカイといふ名はユダヤ系の名前なんですよ」

祖父はアルプス生まれ、中国・北京で宝石商をした。1937年、12歳だった父アンドレとその兄ジャックは、祖父とともにフランスに帰国。だが、第2次大戦が始まって、ヒトラーのドイツがフランスを占領、アンドレとジャックはレジスタンスに加わった。そんなある日、兄のジャックは大学受験にこけたまま行方不明になる。

「ジャック伯父さんの消息がわかったのは、またそんな前ではないんですよ」とクリスティーヌ。ジャックは偽の身分証明書と受験用の本物を持っている、列車の中でゲシュタポに捕まった。送られた先はアウシュビッツ収容所。「インテリ系の仕事の者は」と聞かれて手を挙げたら、翌日にはガス室へ。「学生、弁護士、医者、まます殺



エミール・ゾラ

④「愛國島」塗られるドレフュスの絵
川大佛次郎ノンフィクション全集から

した。ナチスは反ユダヤ反インテリだったんです」

戦後、アンドレは中国研究者になりベトナム、日本、香港に滞在、いまはポルトガルに住む。母アンナはノルウェー人でサン・スクリットの研究者。クリスティーヌも父に従って転々、そしてパリで歴史と日本語を学ぶ。彼女が「愛国心の跋扈を許さずから」と書いた秋水をよみがえらせたかったのは、レイグ家の歴史があったからだろう。

来年は、大逆事件と幸徳秋水が処刑されてから100年。クリスティーヌは「大逆事件とドレフュス事件」をめぐる目論みシンポジウムを開きたい。

1894年、フランス陸軍のユダヤ人の砲兵大尉ドレフュスがドイツのスパイの疑いで逮捕され、蘭采キヤナの悪魔島に流刑になる。真犯人は別の少佐とわかる。だが、「陸軍の名譽」がそれを隠蔽する。作家エミール・ゾラが「奈は譴刺する」を書いてドレフュスの再審に立ち上がった。「反ユダヤ」の大衆は「ゾラを倒せ」と騒ぐ。1906年、ようやくドレフュスは無罪になる。

「フランスは内戦に近い状況でした。大逆事件は、軍部と裁判が結んで弾圧してスターにしてしまった」とクリスティーヌ。シンポジウムで語りたいことは、国家とは、正義とは、正義を貫く勇氣とは……。

日仏会館のクリスティーヌのデスクに少年の写真が飾ってある。「ええ、私の息子。私と付き合ってくれていた、一番かわいい頃」。そして「帝國主義」の虎の巻紙を見せながら「ロベスピエールもマルクスも眞年なんです。私の息子も眞年」と笑った。(早野透)



愛國島へ送られるドレフュス